

地域コミュニティを基盤とした 国際コミュニティ・データベースの構築

岩成玲子、伊藤文人
東北大学大学院教育学研究科



背景と目的

- 社会的孤立・孤独は喫煙と同程度に健康リスクが高く(Holt-Lunstad et al., 2010)、がんによる死亡リスクも高めることが知られており、孤独・孤立の予防は喫煙の課題となっている。
- こうした背景から、2024年4月に施行された孤独・孤立対策推進法では「相互に支え合い、人と人とのつながりが生まれる社会」という文言が盛り込まれ、経済財政運営と改革の基本方針(骨太方針)2023でも「多様な居場所づくり」という文言が盛り込まれている。
- こうした居場所のひとつとして、オーストラリアのコミュニティ・シェッドが世界的に注目されている。コミュニティ・シェッドは、専門家の手を極力借りず、地域住民(主に高齢者)が主体的・自立的に組織運営を行う新たな居場所である(WHO, 2022)。
- 我々はJST-RISTEX「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」において、本邦でのコミュニティ・シェッドの立ち上げと孤独・孤立予防効果の検証を行っている。
- 本提案では、1)インタビューなどの質的データ、2)社会的つながりに関するデータや質問紙データ、脳画像由来のデータなどの量的データをGakuNin RDMに集約・共有し、多様な共同研究を可能にするプラットフォームを構築する。
- 次に、海外で取得したデータを、このプラットフォームに取り込み、国際連携を進めることで国際コミュニティ・データベースの構築を目指す。

研究データの管理・利活用の取り組み

データ名称	データ取得・管理機関	データの特徴	管理の課題
被験者の背景情報に関するデータ、被験者の運動機能のデータ、質問紙データ	東北大、熊本保健科学大、北海道大、島根大、長崎大	個人情報含む	GRDMの利用申請から始めなければならない
インタビューデータ	東北大、熊本保健科学大、北海道大	個人情報含む	匿名化処理が難しい。実験協力者やデータ加工業者、国内外研究者とのデータ共有条件が分からない、GRDMの利用申請から始めなければならない
脳画像データ	東北大、北海道大	個人情報含む、大容量	匿名化処理が難しい(MRI画像のDefacing)
オンライン調査結果、質問紙データ	東北大、高知工大	個人情報含む	GRDMの利用申請から始めなければならない
活動記録動画	東北大、熊本保健科学大、北海道大	個人情報含む	現段階では研究利用予定なし

JST-RISTEX「シチズンサポートプロジェクト」2023年度DMPを改定して作成

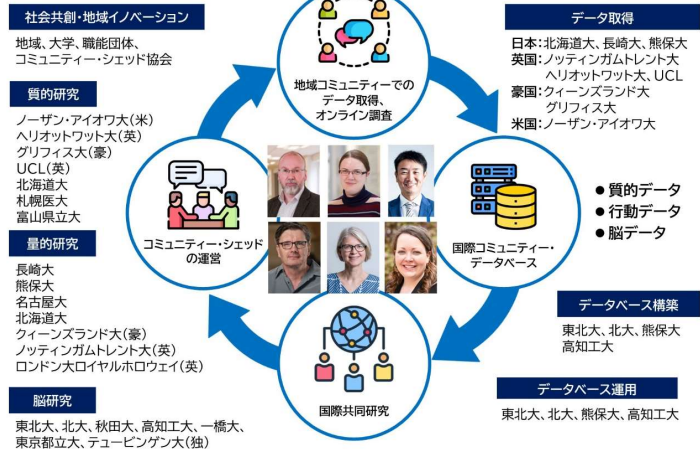
- 表に示す通り、本研究では個人情報を含む多様なデータを取得する。これらのデータのうち、一部をGRDMでセキュアに管理する。

研究概要

地域コミュニティを基盤とした国際コミュニティ・データベースの構築

<最終成果>

社会実装：GakuNin RDMを基盤とした国際共同研究を可能にするプラットフォームの構築
基礎研究：国際コミュニティ・データベースを基盤とした、多様な共同研究の遂行



- GRDMを基盤とした国際コミュニティ・データベースは、インタビュー調査などの質的研究と行動・テキスト解析・脳データ解析などの量的研究を組み合わせた質的・量的混合アプローチを可能とする。
- この国際共同研究により得られた知見は各国のコミュニティ・シェッドに還元し、より良い運営に活用していただく。
- 縦断的に各シェッドのデータを取得し、そのデータをGRDMに蓄積していく。このループを回すことで、より良いシェッド運営を目指すとともに、次世代の地域コミュニティの在り方を模索していく。
- 2024年度はDMPを整理したうえで、熊本県および北海道札幌市で2023年度より実施してきたコミュニティ・シェッドの効果検証に関わるデータ取得で得られたデータを整理し、GRDMに集約する作業を行う。
- 2025年度は国内のデータ集約作業を継続するとともに、米英豪の共同研究者らとデータ共有の方法やDMPについて議論したうえで、データを順次蓄積していく。
- 現状、海外からGRDMにデータを登録することはできないため、最初のステップとして、2024年度に実施する全世界のシェッド(約3,777箇所)を対象にしたオンライン調査の結果を登録していき、その中で得られた課題等を整理したうえで、次のステップに進む。

GakuNin RDMのインフラ活用の メリットや課題、要望

メリット

- セキュアなデータ管理が可能
- データのバージョン管理、加工段階ごとの管理が可能

課題

- 法や規則、契約等に関する適切な研究データ管理
- 情報セキュリティや個人情報、データライセンス、アクセス管理などをPIが監督して進めなければならない
- GRDM内のコンポーネント構造や加工段階ごとの管理に関するPJ内ルールをPIが考える必要がある
- 共同研究者の所属機関がGRDM未登録(近く登録される見通し)

要望

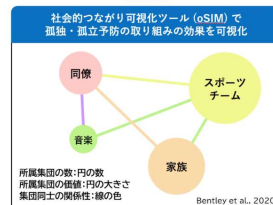
- 個人情報管理の規則や上位の法律などに定められたルールの理解が難しい。支援があるとありがたい。

扱う研究データの管理・利活用のポイント、ノウハウ

- データ取得や管理に関わるプロジェクトメンバーを対象にDMPの講習会を開催(RISTEXの担当者を講師として招聘)
- DMPへの理解が深まることで、GRDMの必要性に対する理解も深まった(他人事から自分事へ)
- インタビューデータなどは個人情報の扱いが難しい一方で、極めて貴重なデータが含まれている。そうしたことから、利用者の範囲、データの公開範囲についてRISTEXの担当者やELSIの研究者らとの打ち合わせを行ったうえで、DMPを見直し、その結果を踏まえてGRDMに集約する作業を行うことが重要と考えられる。

- 社会的つながりを可視化するoSIMはクラウド上で生データを自動保存している。このデータに加え、ある程度加工・整理したバージョンもGRDMに保存しておく(複数の加工段階のデータを集約)ことで、複数のプロジェクトメンバーが進捗状況を容易に把握できるように配慮

Online Social Identity Mapping (oSIM)



GakuNin RDMの活用状況

- まだ始まったばかりのプロジェクトではあるものの、すでに各地の共同研究者間でのGRDM上のデータ共有が始まっている。JST-RISTEXのプロジェクトは今年度から本格研究開発期間に入り、論文発表へ向けたデータ解析が本格化していくことから、今後さらに活発にGRDMを活用していくことが想定される。